

## *Flour Babies*における「語り」および「語ること」の意義

The Significance of Narrative and Storytelling in *Flour Babies*.

海老塚 日菜子\*

Hinako EBIZUKA

**要約** 本稿は Anne Fine (1947-) 著, *Flour Babies* (1992) で行われた語り手による語りと, 日記を通して行われる登場人物たちの語る行為の意義を検討している。本作での語り手は第三者からの視点であり, 主に Simon と Cartright 先生の視点を行き来している。語りを分析していくと, そうした語り選ばれた理由として Simon の性格が語り手として不適格であることが判明した。また, 客観性の高い語りを行うことで, 本作で行われる「フラワー・ベイビープロジェクト」という活動の持つ多様性や, Simon とその他生徒たちの対比から現れる多彩な輪郭を描くことができていることがわかった。合わせて, 上記のように客観性の高い語りを行いながらも, わざわざ登場人物たちに日記をつけさせて彼ら自身の言葉で語る場を提供しているのも本作の特徴の一つである。主人公 Simon は「語る」行為を通して, 子どもから大人へ精神的変化を遂げたことが示唆されている。

**キーワード**: アン・ファイン, 語り, ヤングアダルト

**Abstract** This work examines the narrator's narrative in *Flour Babies* (1992) by Anne Fine (1947-) and the significance of the characters' acts of storytelling that take place through their diaries. The narrator in this work is from a third-person perspective and mainly switches between the perspectives of Simon and Mr. Cartright. Analysis of the narratives revealed that Simon's character was unqualified as a narrator, which is why such narratives were chosen. Results also revealed that the highly objective narratives enabled the author to portray the diversity of the Flour Baby Project that takes place in the work, and the diverse contours that emerge from the contrast between Simon and the other pupils. Another feature of the story is that, while the narrative is highly objective as described earlier, the characters are allowed to tell their stories in their own words through diaries. The protagonist Simon presumably underwent a mental transformation from child to adult through the act of narrating.

**Key words**: Anne Fine, Narrative, Young adult

### 序章

本稿ではイギリスの児童文学作家 Anne Fine 著 *Flour Babies* (1992) の「語り」を中心に扱う。*Flour Babies* は secondary school の落ちこぼれ生徒を集めたクラスに所属する少年 Simon が主人公である。

学校の理科自由研究の発表会のためにクラスでフラワー・ベイビープロジェクトという企画を行うことになる。このプロジェクトは新生児の体重と同じ重さの小麦粉袋を赤ん坊に見立てて世話をする, というもので, 毎日育児日記のような「ベイビー・ダイアリー」をつけることも課題になっている。Simon は自身が生まれてから一ヶ月半で父親が蒸発してしまい, 以降母親と自分だけの家庭で育ってきた。父親の愛情を知らない Simon は自分でフラワー・ベイビーを育てることで, 自身の父親がなぜ自分を捨て

\* 日本女子大学大学院 人間生活学研究科 人間発達学専攻  
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Science, Japan Women's University

て出て行ったのかを考えるきっかけにする。以上が、本作のあらすじである。本作は深刻な題材ながらコメディ調に描かれており、Fineの作家性が活かされた作品になっている。

本作の語りは三人称、つまり語り手が別世界に存在する異質物語世界の物語言説の形式を用いている。また、語りの特徴の一つとして、非焦点化の形式をとっており、語り手により心情が語られるのは主に主人公 Simon とクラスの担任の Cartright 先生である。内包された作者はなぜ語り手にクラスの担任という主人公から距離が近くはない人物の心情を多く描写したのだろうか。

また、上記でも述べたように本作の語り手は主人公の Simon ではなく、物語世界には存在しない。しかし、いわゆる三人称視点であるにもかかわらず、作中では主人公 Simon をはじめとしたクラスの生徒たちが日記を書くシーンが度々登場する。なぜ内包された作者はわざわざ三人称で語らせながら、日記という登場人物自身で語る場を提供したのだろうか。上記の問題とあわせて、以下分析する。

## 第2章 *Flour Babies* の語り

### 1. 語り手が「語る」

*Flour Babies* の語りに着目し、分析を行う。上記で述べたように本作の語りは異質物語世界の物語言説の形式を用いている。語り手は物語世界内に存在せず、登場人物らと個人的な関係を築いているわけではない。また、*Flour Babies* の語りの特徴の一つとして、非焦点化の形式を取っていることが挙げられる。作品内では主人公の Simon に限らず、複数の登場人物の心情が述べられており、さらに、Simon から視点が都度移動するため、Simon のいない場面ですら描写が可能である。そのような形式を用いて視点を調節することで、語り手は物語をコントロールしようとしているのだ。それは主人公 Simon に物語を決して委ねようとしなないことから窺える。

上述のように本作は主人公 Simon の他にも様々な登場人物の心情が描かれている。その中でも、特に焦点が当たる時間が長いのが主人公 Simon とその担任の Cartright 先生である。他の人物の焦点化は比較的短時間であるのに対し、この二人の心情描写は長く描かれ、そしてその描写に合わせて物語は進行していく。つまり、*Flour Babies* は Simon と Cartright 先生の二つの視点を交互に描きながら語られている

のだが、語り手が Simon に物語を決して委ねようとしなない、と考える根拠はこの点にある。Simon は作中、何かに夢中になると周囲のことが目に入らない様子を時折見せている。

And somehow that set him thinking. He pulled the flesh on the back of his hand up into a miniature tent, and then let go. [...]

‘Not a very nice place to sit.’

Someone was stepping over him to get to the urinals. But Simon, off on another tack, scarcely heard. [...]

‘Can’t you find somewhere a bit more salubrious to park yourself?’

The same fellow again, on his way out. Simon paid no attention, his mind on other things. [...]

Neither the neighbours’ whispered comments nor his mother’s sharp orders grazed Simon’s consciousness. He was busy. Busy probing his huge, lank body with a curiosity, a real wonder, he’d never felt before.<sup>1)</sup>

ここでは、Simon は「自分」という存在に初めて気がつき、その突然の発想に周囲の声も聞こえないほどに夢中になっている。そして、語りはそうした様子の Simon を外側から描いている。他の場面でも、Simon が物思いに耽る度に、語り手は Simon への焦点を外し、客観的に描写している。

And now, in the stuffy detention room, the tunes he’d thought of came back, one by one, and idled through his mind as his pen tracked over the paper, steadily setting down in his flour-baby diary everything his mother had told him the night before. When little snatches of song broke through his clenched teeth in a soft whistling, Miss Arnott didn’t bother to hush him. He wasn’t trying to disturb the others, after all. He didn’t even seem to realize he was doing it.<sup>2)</sup>

この場面は Simon が日記を書きながら、父親がかつてよく吹いていた口笛について考えているシーンである。歌を無意識のうちに口ずさむほど自身の考えに没頭している様子が Arnott 先生の視点から描か

れている。これらの引用から、語りが Simon の思考だけに沿うことを避けていることがわかる。語りは主人公である Simon の思考にのめり込むことなく、一定の距離を取ろうとしているのである。

また、Simon は思考にのめり込む以外にも自己評価が低いという特質も持っている。Simon の自己評価が低い理由は父親に捨てられたと感じていることや、日常的な学校での失敗体験によるものだと考えられる。しかし、自己評価の低さは周囲の人物への評価にもそれが原因でひずみを生じさせる可能性がある。例えば、Simon は自身への肯定感が低いばかりに、母親からも愛されていないと考えていた。

She(Simon の母) was joking, he(Simon) supposed. But still, it was a thought. Having him must have made all the difference. He'd come along, a whole other person to be taken into account. Real, too. Not just something like a flour baby that could be shoved in a plastic bag to be kept clean, without fetching up on some murder charge. When had she realized how much trouble he was going to be?<sup>3)</sup>

この場面では Simon は自身の母親の人生を自分が生まれたことによって変えてしまったことに罪悪感を覚えている。Simon は母親が自分を生んだことを後悔していると思っっているのである。しかし、Simon の母親は寡黙な息子に手を焼いているものの、Simon に深い愛情を抱いていることは作中の描写から明白である。このように、Simon は自分自身、また、周囲の人物を適切に捉えられていないのである。そのために語りは Cartright 先生にも焦点を当てることを選んだ。

クラスの担任である Cartright 先生はどの生徒からも一定の距離を保ち、また、生徒を「個」ではなく、クラスという「集団」として認識しているようである。Cartright 先生の視点からは Simon に注目が集中することなく、周囲のクラスメイトも同じよう客観的に描写されることが多い。さらに、Cartright 先生は物語の始まる年度から、初めてこのクラスの生徒たちと出会っている。そのため、物語以前に生徒と関係を築いていないために生徒への目線になんらかの個人的な感情が含まれている可能性が低いのだ。だからこそ、語りは Simon と対比して客観的に

描写する役割を Cartright 先生に任せただけではないか。つまり、担任というクラスの集団に属しながらも、生徒と同じ目線になることはない特殊な立場にいる人物に描写をさせることで、個人的な感情で人物像が歪むことを避けているのである。また、同様にどの生徒からも平等に距離を取る教師に焦点を当てることで、主人公の Simon に特別に焦点が当てられることを防ぎ、他のクラスメイトのことも描写できるようにしているように考えられる。

以上のように、Flour Babies の語りは主人公 Simon の一人だけに注目することを徹底的に避けている。Simon の主観的な視点に沿いながらも、定期的に客観的な教師の視点を混ぜることで、非常に中立的な語りであろうとしているのである。語りは主人公 Simon の主観に完全に委ねることを避け、さらに、Simon 以外のフラワー・ベイビープロジェクトに取り組む生徒たちにも担任の視点を通して焦点を当てているのだ。

なぜ、語り手はそのような語りのコントロールを行なっているのか。それは、フラワー・ベイビープロジェクトの持つ多面性に由来していると考えられる。フラワー・ベイビープロジェクトは理科自由研究の発表展示会のために行なった企画である。企画の到達目標は以下のように言及されている。

Each boy takes full responsibility for his flour baby for the whole three weeks, keeping a diary to chart his problems and attitudes. It's quite interesting what comes out. It's fascinating what they learn, about themselves and about parenthood.<sup>4)</sup>

実際に、この当初の目標のように自分自身について、もしくは親というものについて学んだ生徒は少なくない。Simon も詳しくは後述するが、フラワー・ベイビーと自身を重ね合わせることで、自身の父親に抱えていた思いを整理するに至った。また、他にもプロジェクトで擬似育児を経験することで、自身の親に限らず一般的な育児というものについて考えるきっかけを得た生徒もいる。

'Yeh! People with babies have to be totally unhinged.'

'Barking mad.'

It was Sajid, as usual, who put the point over most coherently.

‘I mean, they stroll around all day with these real ones tucked under their arms that keep bawling and messing and having to have their bums wiped –’

‘Not just their bums!’ interrupted Henry. ‘My mum says you have to keep wiping their noses.’

‘Grotesque!’<sup>5)</sup>

上記の会話では育児の大変さを、身をもって知った生徒たちが一般的な育児の苦勞について話している。このように、フラワー・ベイビープロジェクトの当初から想定していた通りの到達目標に達した生徒の様子は多く描かれている。しかし、その一方でこの企画を通して、想定されていないような方向に着想を得た生徒たちも描かれている。

‘The more flour babies I can cram in, the more money I make.’

Simon was mystified.

‘Money?’

Sajid turned to stare.

‘This isn’t going to be a charity crèche,’ he told Simon sternly. ‘If I’m taking responsibility, I’m taking money. That’s business.’<sup>6)</sup>

例えば、この生徒はプロジェクトでの育児体験から、育児をビジネスにすることを考えついている。周囲が育児を面倒がっている様子や、また、自分自身の煩わしい思いから、それをビジネスに結びつけているのである。また、他にも育児を経験し、その苦勞を感じたことで無責任な性行為について考えるきっかけを得ている生徒もいる。

‘Having a baby by accident!’

‘Strick!’

‘I’d never have one by accident. Never!’

Bill Simmons seemed almost in tears at the idea. ‘It’s horrible even to think about. One careless moment and then – hell on wheels!’

Gwyn clearly agreed with him. [...]

‘And it might not even be your fault,’

he warned them all conspiratorially. There was

sheer consternation at the thought that anyone present might end up with a baby through no real fault of his own. For the second time in under three weeks, 4C fell absolutely silent.<sup>7)</sup>

この引用のように、このプロジェクトは児童発達の面だけでなく、性教育としての役割も担っているのである。

本作の語りは Simon とそのクラスメイトの様々な視点を描くことで、フラワー・ベイビープロジェクトの多面性を表現している。一方で、この多面性は Simon の視点だけでは語るができなかつたであろう。上記で述べたように、Simon は自己評価が低いため、他者への視点にも歪みが生じているからである。また、一人で自身の考えを深めることにのめり込み、時折、外の世界から自身を遮断する様子を見せているため、他のクラスメイトがこのプロジェクトをどのように感じているかを平等に述べることは Simon には不可能である。本作の語り手はそのような Simon に語りを任せず、クラスの担任という客観性の高い視点を交えることで、Simon だけでなく他の生徒についても語れるように語りを調整しているのである。内包された作者という考えが物語論には存在する。それは、現実の作者とは異なる物語内に再構築された作者の虚像のようなものである。この内包された作者は、Simon に語りを任せず客観性を保持することを心がけていることから本作の主人公は Simon であるものの、ある種の群像劇的な形でフラワー・ベイビープロジェクトを描きたかつたのではないかと考えることができる。

この非常に客観性の高い語りは主人公 Simon と他のクラスメイトとの対比をより際立たせている。以下、Simon とクラスメイトの対照的な描かれ方を追うことで、本作の非焦点化の形式の活用の仕方を考察する。

例えば、以下の場面である。

Mr Cartright gazed out at the worried faces, all struggling with the idea of having to defend themselves against the terrible dangers on the horizon. Only one member of the class didn’t seem swept up in the general anxiety, and that was Simon Martin. Simon was sitting chewing his pen and staring thoughtfully out of the window. He’d

been quiet throughout the whole hubbub.<sup>8)</sup>

この場面では他のクラスメイトが話している中で、Simon は一人考え込む描写がされている。Simon は作中、担任の Cartright 先生から何を考えているのかわからない寡黙な生徒、と評されている。確かに、本作を通して Simon が周囲の人物と話している場面は多くない。しかし、Simon の心情に焦点が当たった際は、自身の父親や母親のことを周囲が見えなくなるほどに考え込んでいるのである。前述のように、考え込むと周囲が見えなくなる性格は Simon の特質の一つである。この場面では、騒ぐクラスメイトと対比的に考え込む Simon を描くことで、そのような Simon の性格の一部分をより強調していると考えられる。

また、プロジェクト開始当時から、Simon と他のクラスメイトとはフラワー・ベイビーに対する感情が異なっている。Simon のフラワー・ベイビーへの異常とまで言える愛情は本作で Simon が示す最大の特徴の一つである。Simon のこの異常な愛情は、特に他のクラスメイトとの対比を以って際立つ。他のクラスメイトはフラワー・ベイビーを受け取ってもただの小麦粉袋としか思っていない描写がされているからである。これらのプロジェクト開始時の反応の対比では、Simon のフラワー・ベイビーに対する愛情が強調され描かれている。また、前述のように、プロジェクトを通して生徒たちは育児への様々な考えへ到達する。Simon はいなくなった自身の父親へ考えを巡らせたが、他にも育児一般の困難さを学ぶ者、無計画な性行為の責任を感じる者など様々である。これらのプロジェクトへの多面的な到達点を客観的な語りで描くことで、それぞれの持つ考え方が対比されそれぞれの人物の輪郭がより鮮明になっていると考えられる。

さらに、フラワー・ベイビーへの認識の違いでも Simon とクラスメイトは対比的に描かれている。

‘What was I like?’

His mother sucked a stray bean off her fingertip.

‘When?’

‘When I was a baby.’ [...]

Simon propped the flour baby up in front of him, and stared at her beautiful round eyes. He felt sour all over suddenly.<sup>9)</sup>

この場面では、Simon は自身の幼少期を聞いた後にフラワー・ベイビーを見つめている。Simon は幼少期に父親が出て行った過去から、自身が親に捨てられたと感じており、そのことが原因で自己肯定感も低くなっている。Simon はフラワー・ベイビーを見て、自身の幼少期を考えることが多く、その様子は父親に捨てられた幼少期の自分をフラワー・ベイビーに重ね合わせているように見える。また、フラワー・ベイビーの世話をする際も自身の育った環境と重ね合わせている。

Last night, when I was rocking her in my arms, Mum said I reminded her of someone. She didn’t say who, and I didn’t have to ask.<sup>10)</sup>

Simon は上記の引用のように自分を父親と重ね合わせているような場面も多く描かれている。他にも、父親を反面教師的に扱い、自分を捨てた父親に対してフラワー・ベイビーを決して見捨てない自分に満たされている様子も見られる。Simon は幼少期の自分とフラワー・ベイビーを重ね合わせ、自身が満足するように育てているのではないかと考えられる。そうすることで、満身に愛されなかった自分自身へのコンプレックスを解消しているのである。そして、さらに育てている自分を父親に置き換えている。そうして、父親を演じながら父親に愛されなかった自分を育て直すことで愛されなかった自分を慰めているのである。

一方で、他のクラスメイトたちのフラワー・ベイビーへの認識は Simon のものとは異なっている。例えば Philip という生徒はフラワー・ベイビーに自身を重ね合わせるというよりは、世間一般の赤ん坊へ重ね合わせ、その育児への感想を述べていた。他の生徒のプロジェクトを終えた感想も、Simon のように自身の父親へ結びつけるのではなく、一般的な育児そのものへの感想がほとんどである。このように、フラワー・ベイビーへの認識においても Simon とクラスメイトたちは対比的に描かれている。この対比によって、Simon の自身の幼少期へのコンプレックスが強調されているのである。

このように、本作では Simon とクラスメイトの対比があらゆる点からなされている。この鮮やかな対比はクラスを群像的に描いた非焦点化の形式、およ

び客観性の高い語りであったからこそ可能であった。本作はそのような形式を用いて、Simon とクラスメイトを対照的に描くことでどちらの輪郭も明瞭に浮き立つようになっているのである。

以上のように、上記では語り手がなぜ Simon と距離をとり、Cartlight 先生的心情も描写していたのかを考察した。フラワー・ベイビープロジェクトの多様性、また他者と自身を客観的に比べることが苦手な Simon に代わり、Simon とほかの生徒を比較することで Simon はもちろん他の生徒の人物像もはっきりと際立たせる効果を語り手の語りは発揮していることがわかった。

## 2. 語りを通した自己整理

つぎに、上記のように三人称で物語を語りながらも、Simon やそのほかの生徒たちに毎日の日記を課すことで自身の言葉で語る場所を提供した意味を分析する。Flour Babies の語りにおいて、生徒たちが課題に課されている「フラワー・ベイビー日記」は非常に大きな意味を持っている。これは、日毎につける育児日誌のようなもので、育てている際の気づきや考えなどを記録するように取り決めがされている。しかし、「フラワー・ベイビー日記」は日記の形を取りながらも、実際の日記とは少し意味合いが異なっているのである。日記とは一般的に、自身のために書くものであり、それが第三者に読まれることは想定されていない。日記の筆者は自分のためだけに自身の日々の記録をつけているのである。一方で、このプロジェクトにおける日記は最初から第三者であるクラス担任の Cartright 先生が読むことが約束されている。つまり、私的なはずの日記が公的なものへと変貌しているために、生徒たちはこの日記を第三者に読まれる前提で書いているのだ。読み手がいると思いつながら自分の気持ちを綴る行為は、その読み手に向かって自身の心情を語ることと同じ意味を持つのではないか。本作では、上記で述べたように Simon の主観的視点と Cartright 先生の客観的視点を交互に使い分けながら、どの生徒にも偏り過ぎることがないように非常に慎重に距離を図っている。そのような語りが行われている本作において、この「フラワー・ベイビー日記」が唯一自身の心情を語ることができる場所として用意されているのである。さらに、本作は不特定多数の心情描写が次々と描かれる非焦点化の形式を用いている。それぞれ

の心情描写は継続的に描かれることはなく、また、一度に描写される心情表現も一行から二行ほどのものである。主人公 Simon 以外のクラスの生徒らはほとんどがその外見や行動を描写されるだけである。つまり、読み手は彼らの人格を描写された発言や行動でのみ判断せざるを得ないのだ。したがって、この日記は読み手が彼らの心情を把握する貴重な機会であり、また、だからこそこの日記に綴られる彼らの語りが強調されるのである。

また、この日記は Simon をはじめ、プロジェクトに取り組む生徒たちにとっても大きな意味を持っている。上記で述べたように、この日記は書いている時点から読まれることが想定されているため、生徒たちも読み手に伝えることを当然、意識しながら書いている。しかし、他人に自身の行動の記録や考えを語ることは容易ではない。特に、自身の思考を述べることは難しく、実際に生徒らもプロジェクト開始直後は自身の行動記録を書くことしかできていない。

I went round and told that woman next door I wasn't getting much sleep, and she went totally unpicked. I only just managed to get off the doorstep ahead of the lava. I don't understand people with babies, really I don't.<sup>11)</sup>

この日記を書いたのは Philip という生徒だが、彼もこの引用のように、最初は自身の行動を描写するだけであり、子育てをしている人の心境については考えられないでいる。Philip に限らず、このプロジェクトを始めた当初は自身の考えを述べるに至らず、ただその日あった出来事を書いているに過ぎない日記も多かった。しかし、生徒たちはプロジェクトを進めることで繰り返し日記を書いている。また、この日記は上記でも述べたように自身のためだけの日記ではなく、読み手がいる前提、つまり、自身の行動や考えを他人に語ることを生徒たちは何度も行っているのである。それを繰り返すことで、多くの生徒たちはプロジェクトの終盤には最初は述べられなかった自身の考えを述べられるようになっていく。

What got me most about the flour babies was how sneaky people are. They go round pretending they're just being friendly and chatting to you, but

really they're telling you you ought to be doing things differently. 'I'll tell you how I coped with mine,' they say, smiling creepily. Or, 'What I found worked best was this.' And you're supposed to smile back, and pretend you're so thick you haven't realized that they're telling you off.<sup>12)</sup>

この日記は先に引用した Philip のものである。先述した引用部分では赤ん坊の夜泣きに文句を言われて怒る母親の心境がわからないと述べていた。しかし、Philip はプロジェクトを通して自身が子育てを経験することで、育児を行う当事者を巡る周囲のお節介のやかましさに共感を示しているのだ。プロジェクトの終盤になり、自身の考えを述べられるようになってるのは、プロジェクトを通してそれぞれ育児に対して考えが芽生えたからである。また、読み手を想定し考えを整理し、綴ったために自分の考えが明瞭になったというのものもあるだろう。主人公 Simon もそのような経験をしていることが、Simon の日記を見ると感じられる。さらに、この日記というのは本人が記述しているシーンが作中で描かれず、Cartright 先生が読むシーンのみ描写されている。唯一、作中で日記を記述している描写がなされているのが Simon である。Simon の以下の場面では、特に日記への記述を経て、自身の思いが整理されていく様子が描かれている。

Simon broke off. He wasn't sure how to describe the next bit. [...]

And now, in the stuffy detention room, the tunes he'd thought of came back, one by one, and idled through his mind as his pen tracked over the paper, steadily setting down in his flour-baby diary everything his mother had told him the night before.<sup>13)</sup>

この引用の冒頭は Simon が記憶を辿りながら日記を書いていたところ、どのように書いていいかわからずペンを止める場面である。Simon はこの後、自身の記憶を反芻しながらそれについて考えていく。そして、引用の二段落目のように、思い出した記憶を日記に綴りながら考えを整理していくのである。このように *Flour Babies* の中では、日記が私的なものから公的なものへ変わることで、自身だけの記憶を

保持する道具から、読み手に伝えるために自身の考えを整理する道具へ役割を変えている。一般的な日記形式の作品では、その内容の方が大きな意味を持つが、本作においては書いた内容よりも「書く」行為そのものに高い意味合いを含んでいるのだと考えられる。Simon をはじめとした、クラスの生徒たちは「書く」行為、すなわち「語る」ことを通して、自身の考えを明瞭化させ心情的な変化を遂げているのである。

### 3. 「語る」ことの意義

では、その「語り」を通して起こった心情的な変化とは何であるか。まずは、本作品における大人と子どもについてそれぞれ定義を考える。

本作に出てくる大人と子どもを比べた際に、最も特徴的なのは自身の置かれる状況に対しての考え方の違いである。担任の Cartright 先生は落ちこぼれの生徒が集められたクラスに対し期待を抱いていない。だからこそ、フラワー・ベイビープロジェクトを通して生徒たちに変化が見られた際に驚いている様子を見せる。

Up until now, Mr Cartright had not really noticed that many compensations came his way for having to teach 4C. But now he saw that most of them, even if they weren't all that bright, did at least make the effort to stay chirpy.<sup>14)</sup>

Cartright 先生は客観的な視点を提供する役割であり、その役割通りクラスに対して非常に中立的であった。つまり、学年の勉強のできない子どもたちを集めたという評判通り、生徒たちを落ちこぼれと見なして何も期待していなかった。また、Simon の母親も夫が家に帰ってくることを全く期待せず、夫がこの家庭にはもう戻ってこないという確信を常に持っている。それは、自分たちの家庭の状況を受け入れたために、客観的に判断できているためだと考えられる。本作の大人とは自身の置かれた状況を受け入れ、その状況を客観的に見られるようになるというものだと考えられる。また、客観的に考えることで理想に対してある程度諦められるようになっていくといった姿も特徴として挙げられる。

一方で、子どもは自身の置かれた状況に対して、どのような反応を見せているだろうか。Simon はフ

フラワー・ベイビープロジェクトを通して自身が幼い頃に家を出ていった父親へ思いを馳せる。

Simon propped the flour baby up in front of him, and stared at her beautiful round eyes. He felt sour all over suddenly. Suppose his dad was able to see the future. Did that make up for Simon not being able to see the past? Anyone who'd ever met their real dad could put it together somehow. Take off some middle-aged spread. Wipe out a few wrinkles. Add a bit of hair. But if you'd never so much as seen the man - [...]

'And how was I supposed to know he was going to walk out on me? Women don't always get a week's notice, you know!' <sup>15)</sup>

ここで、Simon はフラワー・ベイビーを見つめながら自身の父親について考えている。そして、父親が自分を見捨てて出て行った事実を受け入れられないでいる。Simon はプロジェクトを行いながら、フラワー・ベイビーを自分自身とみなし、また、それを育てる自分を自身の父親だと想定し、ベイビーを可愛がることで、自分の父親の育児中の気持ちを想像している。その中でSimon は、自身が捨てられたという状況から目を背け、赤ん坊はこんなに可愛らしいのだから赤ん坊だった自分を父親が捨てるわけがない、と思いつまうとしているのである。このように、大人像と比べ子ども像というのは、自身の置かれる環境に不満がありながらもそれを受け入れることができている、という思考が共通しているように考えられる。

このように見ていくと、本作における子ども像とは理想と現実の乖離に苦しむ姿であり、大人像はその理想を捨て、現実を受け入れていく姿なのである。

本作においては「語る」という行為が重要な役割を果たしていた。それは語り手が物語の世界外にいる物語言語であるにも関わらず、日記を用いることでわざわざSimon が語るができる場所を提供していることからわかる。Simon に関しては課題であるフラワー・ベイビーの育児日記を通して自身の思いを言語化し語ることで、自分の父親への思いと満足に愛されることができなかった自分を整理することができた。自身の決して叶わない理想に逃避することを止め、最終的に自分の状況を直視し、受け

入れているのである。

この自身の状況を直視できることは上記のように本作では大人がもつ特徴として描かれている。つまり、「語る」という行為を通して、子どもから大人へと心情的な変化を遂げたのではないか。Curry(2008)はFine の *A Pack of Lies* と Robin Klein 作 *Hating Alison Ashley* を比較した論文で次のように述べている。

By creating stories or constructing lies, Erica and Kitty become honorary authors, gaining in self-confidence and subjectivity through increased possibility for self-expression.<sup>16)</sup>

As in *A Pack of Liars*, storytelling, although dubious in its implications, finally allows the protagonists to accept the situations in which they find themselves and find a creative and entertaining solution to the problem of unhappiness, transforming that which is pain fully or makes them unhappy into something safe, productive and empowering. (ibid.)

ここでCurry は物語を作ることや語ることで自己肯定感や主観性を得られると分析している。また、語ることが自分の状況を受け入れることを助け、問題に対する解決策へ導いているとも述べている。この語りを通して起こる精神的成長はSimon にも当てはまる。Simon はフラワー・ベイビーの育児日記を書くことで、自分の状況を受け入れている。つまり、理想通りではない自分を受け入れられる自己肯定感を得ているのである。

*Flour Babies* の分析を通して考えると、「語る」行為は子どもたちが苦しい状況から抜け出すための手段となっていると考えられる。「語る」ということは自身の置かれている状況を理解していなければできない行為であり、満足のいかない自分を言葉にして発する行為はそのような自分を受け入れる、ある種のリハビリのようなものとなり得るのである。子どもたちはその「語る」という行為を通して、子ども像である理想と現実の狭間で苦しむ状況から、自身の状況を受け入れるまでに至っているのだ。



## 終章

本稿では *Flour Babies* における語り手の語る意義および登場人物が語る意義について検討してきた。主人公である Simon と担任の Cartwright 先生的心情を主に行き来する語りでは、フラワーベイビー・プロジェクトのもつ多様な意義、また、Simon とその他生徒の輪郭も多彩に描き出した。さらに、プロジェクトを通して日記の課題を課すことで、語りでは補いきれない心情描写を補足すると同時に、「語る」行為を生徒たちに行わせ、子どもの考えから大人の考えへ精神的变化を遂げさせた。本稿の語りは非常に客観性の高い視点を維持しながらも、登場人物たちに直接「語る」場を提供することでそれぞれの心情を直に語る機会を設けていると考える、一挙両得的な語りと言えるだろう。特にわざわざ日記という道具を使い登場人物たちに語らせ、その語りの中で精神的变化を遂げたことは特筆すべきことであり、今後の研究と合わせ Fine の「語る」行為に向ける視座を考えるひとつの手立てとしたい。

## <引用文献>

- 1) Fine, Anne. *Flour Babies* : Hamish Hamilton, 42-44 (1992)
- 2) 前掲 1), 90-91
- 3) 前掲 1), 41
- 4) 前掲 1), 24
- 5) 前掲 1), 129-130
- 6) 前掲 1), 95-96
- 7) 前掲 1), 132
- 8) 前掲 1), 133-134
- 9) 前掲 1), 44-45
- 10) 前掲 1), 182-183
- 11) 前掲 1), 129
- 12) 前掲 1), 179-180
- 13) 前掲 1), 86-91
- 14) 前掲 1), 137
- 15) 前掲 1), 45-46
- 16) Curry, Alice. "Lying, or storytelling, as antidote to unhappiness in Robin Klein's *Hating Alison Ashley* and Anne Fine's *A Pack of Lies and Goggle-eyes*." *Explorations into Children's Literature* 18:1, 41-47 (2008) search.informit.org. Accessed 20 October 2022.

(指導教員：川端有子教授)

